

長野高専英語同好会活動における実験的英会話教育法

——実践的英会話能力の養成を目指して——

山 崎 健 一*1

Some experimental methods of teaching English communication in NNCT English Club
—Aiming at improving the students' practical skills for English communication—

YAMAZAKI Ken'ichi

Four years have passed since English Club was established in NNCT. This paper is a report based on the English Club activities conducted in these four years. First, the details of the activities are introduced. Second, some problems found mainly in the conversation with the students are listed. Third, several methods to improve the situation and their effects are discussed. And lastly, the result of questionnaire of the members and other issues to be solved are presented.

キーワード：英会話，リスニング，プレゼンテーション，スピーチ，国際交流

1. 英語同好会について

長野工業高等専門学校英語同好会は2012年4月に創設され、2016年3月まで4年間活動してきた。設立の趣旨は、英語を話す場を学生に提供するというもので、基礎的な英語力の向上や単語や文法等の学習は行わない。2016年3月現在メンバーは5年生4名、4年生4名、3年生4名、2年生8名、そして1年生4名の計24名である。本科に在籍する留学生も加入しており、5年生にベトナム人1名、4年生にラオス人が1名いる。実用英語技能検定取得者は、準1級2名、2級9名である。活動日は毎週火曜と金曜が通常の活動で時間は午後4時から6時まで。これに加えて水曜日にはアメリカ人による90分間の英語レッスンがある。

2. 本論の目的

本論においては、まず同好会活動内容を紹介し、その活動内容の有効性を、英語教育の専門家の意見と照合することにより検証する。さらに、同好会メンバーに対して行ったアンケート結果を基に、英語同好会と英会話教育の今後の展開を示したい。

*1 一般科准教授

原稿受付 2016年5月20日

3. 活動内容

火曜日と金曜日の活動では、主に様々なトピックに関する英会話が行われる。1年生と上級生との実力の差が大きな問題の一つであるために、基本的に顧問の教員は1年生とグループを作り、ゆっくりとしたペースで会話を進める。残りの学生は、4人から6人ほどのグループに分かれるか、ペアを組んで教員が用意したトピックについて会話をする。トピックの例としては、以下のようなのものがあげられる。

Table 1

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. Did something different happen to you? 2. Do you think we need PE class? 3. Male or female, which is easier for you to make friends with? 4. Who is the most important person in your life? 5. If you had only 24 hours to live, what would you do? |
|--|

Table 2

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. Tell us about your last exam. 2. Tell us about your short term goals. 3. Tell us about the latest book you read. 4. Tell us about your best memory of junior high. 5. Tell us about your plan for the summer vacation. |
|---|

Table 3

Private Detective	Client
May I help you?	Yes, I lost my best friend 10 years ago. I'm trying to find him / her.
Ok. When was the last time you met him / her?	I met _____
What did you do to contact him / her after that?	Well, _____
What, When, How, Why, Where,	
1 _____ work?	He / She _____
2 _____ wear?	He / She _____
3 _____ live?	He / She _____
4 _____ look like?	He / She _____
5 _____ name?	He / She _____

Table 4

1. My favorite app for iphone
2. Why do leaves change color?
3. My homestay program in Australia
4. Koto, a Japanese traditional musical instrument
5. English pronunciation

毎回約10のトピックを用意するが、2時間の活動時間のすべてを会話にあてた場合、すべてのトピックを消化することは稀である。その場で自分の意見を書いて準備する場合も、すぐに会話を始める場合も、一人が発話したらそれを聞いたメンバーはそれぞれ質問をしなければならない。当然発話者はその質問に即興で答える必要がある。それぞれのトピックについて、5から10程度の英文を作るように指導している。

単なる会話活動だけでは参加者の集中力を維持することは困難であるため、この他様々な手法を取り入れている。ロールプレイは、発話練習に非常に有効であるが、初学者には自分の意見でなく架空の人物の思考を想像する必要があるため、難易度の高いものである。¹⁾そのため、ロールプレイをする際には、必ず数分の準備時間をとり、会話が途切れないように配慮した。また、Table

3のように、あらかじめ会話の台本を学生に与え、空欄に単語を記入すれば会話が成立するようにワークシートを作成して学生の便宜を図った。

また、グループなどに分かれて会話をする前に、メンバー同士が打ち解けるためにウォーミングアップとして語彙説明のタスクを学生に課している。最初に電子辞書にある英英辞典を使っていくつかの単語を調べさせる。学生は英英辞典の説明を参考にして、教員が用意した単語を英語で説明する。語彙は日本文化に関するものと、簡単な英単語の二種類がある。周りのメンバーは発話者が何を説明しているのか知らされていないので、一種のクイズのように推測しながら解答を探す。説明不足である場合や複雑な語の説明をしている場合は途中で質問してもよい。

Show and Tell は、水曜日にレッスンを行っている外国人講師により紹介された。文具や本など、身近のものについて英語で説明するというものである。これも語彙説明と同様にウォーミングアップとして、あるいは会話練習の途中の息抜きとして機能する。ただ、語彙説明とは違い、個人的なことを話すため、周囲のものから様々な質問が期待でき、活発な会話へと発展することも少なくない。

プレゼンテーションも同好会員に課せられる重要な課題の一つである。毎回2名の担当者を決め、事前に準備させた資料を基に発表させる。ほぼ全員がパワーポイントを活用し、手の込んだスライドを用意してくる。パワーポイントを使用しない場合は、プレゼンテーションの内容に関係のある写真等を用いて聴衆の視覚にも訴えるように指導している。発表時間は3分から5分で、原稿の扱いはメンバー間でさまざまに異なる。上級生になると、スライドだけ用意して原稿の準備なしに即興で発表する場合が多い。Table 4は、学生が実際に発表したタイトルの例である。

スピーチ活動も英会話能力養成には有効なもののひとつであるが、長野高専で毎年行われる校内英語スピーチコンテストを大いに活用している。コンテストは二部構成で、1、2年生は自由に選んだ英文をレシテーションし、上級生は自作のスピーチを発表する。制限時間はレシテーションが3分、スピーチが5分である。同好会のメンバーは1年から3年生までは参加が義務付けられているため、基本的に全員参加する。コンテストの直前には、全参加者で模擬的な同好会内コンテストを実施している。

本科生として長期滞在している留学生の他に、海外の国際交流提携校から派遣される短期の留学生が最近増えている。特に2014年度は30名ほどが数週間から最大3ヶ月ほど長野高専に滞在した。その際、留学生と

直接交流するのが英語同好会員である。短期留学生が滞在している間の同好会活動はすべて彼らとの共同作業にあてられる。ただ、年度初めの段階では、外国人と接することにストレスを感じる1年生は日本人のみで別行動をした。同好会員の間に英語力の差があることを考慮すると、ペアワークよりも6名程度で活動したほうが効果的と考え、グループに分かれて様々なトピックについて議論した。Table 5 は実際に短期留学生と交流する際に用意したトピックである。

Table 5

1. Why do Japanese people like <i>anime</i> so much?
2. What is the main industry in Hong Kong?
3. What is popular sport in Hong Kong?
4. What are the differences between Hong Kong and Japan?
5. How can Japan and Hong Kong work together?

Table 6

A 自分の考えを英語になおせない。
B 日本語をそのまま英語にしよう。
C 単語を並べるのみで、文として成立していない。

4. 問題

次に、学生が持つ英会話に対する抵抗感と、これらの活動がその抵抗感をどのように解消できるかという点について論じてみたい。ここでは、プレゼンテーションなどのようにあらかじめ原稿を用意した活動ではなく、即興で会話する必要があるグループワークとペアワークに限定して考察する。

筆者も含め、日本人が英語を用いて他者とコミュニケーションをはかる場合、時に困難を感じる場合が様々な状況下において存在する。例えば、会話に参加する全員が話すべきテーマについて無知であったり、情報量があまりに少ない場合にはたとえ日本語で会話しても、それほど盛んな議論は期待できない。そのような状態を回避するため、会話活動のために用意するトピック選択にはできる限りの注意を払っている。例えば、あまりに学生生活の現実からかけ離れた話題は避けるべきである。また、英語学習者にとって国際情勢のような話題は極めて理想的でもあるが、たとえ留学生と会話をする際にも、予備知識のほとんどない話題は不向きである。²⁾

たとえ慣れ親しんだ話題について会話していても、学生が思うように会話をできないと感じる場合、Table 6 のような状態に陥ることがある。これら3つの現象は単独で発生することもあれば、連続した形ですべて起こる

こともある。AとBに関しては、いわば学生の英語能力の問題である。例えば、実際の会話活動においてある学生は「私が子供の時、私は一緒に住んでいた祖父からすばらしいクリスマスプレゼントをもらった」と発言しようとした。しかし彼は次のように途中で発言をやめてしまった。‘A big Christmas present was given...to...me...when...’これは一例に過ぎないが、この英文が完成されなかった原因は、まず、発言を受動態で始めてしまったことにある。特に二重目的語を持つ文の受動態を即興の会話中に作成することは、経験の浅い初学者には困難である。また、基本的文法知識の不足も遠因であろう。³⁾

また別の学生は、「自分は試験前に充分勉強をすべきだった」という発言をしようと試みたが、うまくいかなかった。彼は、‘Before the exam, I...ah...no study.’と述べるにとどまった。この際筆者は英語による会話を止め、日本語で何を言いたいのか、それをどんな文で表現しようとしたのか検証した。彼の場合、「～すべきだった」という意味の‘should have + past participle’を思い出そうとしていたということだった。この表現は当然高専に入学してから英語の教科書で学んだものであるが、授業で学習しても自分で使用するほどには定着していなかったであろう。この現象は、まず発話者がその表現を使い慣れていなかったということが原因として起こったと推測される。また、別の学生は、「最近余裕がない」と表現するため、‘These days, I have no margin.’と語った。本人曰く「余裕」という日本語から‘margin’を連想し、このように語ったとしている。これはBの日本語をそのまま英語にしてしまった例である。

以上の問題は、いずれも学生の様々な能力不足に起因することである。具体的に不足しているものとしては、単語力、文法的知識、構文的知識、それから英会話の経験であろう。さらに言えば、基本的コミュニケーション能力の不足は時に非常に深刻である。一方、学生が英語同好会の会話活動で思うようにコミュニケーションをとれない原因の一つは、学生の能力的問題の他に、もう一つ、環境的な問題がある。日本人同士で英語を用いて会話をするという行為は、大人であっても教員であっても躊躇するものである。以下、能力的問題と環境的問題を解決ないしくら解消するために、英語同好会で実際に運用している活動法について論じる。

5. 能力的問題の解決策

Table 6 のAに関しては、学生の自主学習を促すしかない。特に長期休みには、単語や構文の暗記のような課題を課している。Bの問題は、英作文の基礎から指導し

ている。大学受験の英作文対策指導や会話教室等における英会話訓練において和文和訳という言葉が用いられて久しいが、同好会でもこの手法を取り入れている。⁴ 筆者が行っている和文和訳の指導法を簡潔に表すと、次のようになる。

Table 7

第一段階	言いたい文を日本語で考える
第二段階	その文を英語に変換しやすい日本語の文に直す
第三段階	直した日本語の文を英語に直す

Table 8

1. <u>It seems that</u> this problem is difficult.
2. <u>I am sure that</u> this problem is difficult.
3. <u>I think it is clear that</u> this problem is difficult.
4. <u>I am not sure but I think that</u> this problem is difficult.
5. <u>Recently I have been feeling that</u> this problem is difficult.

Table 9

1. I want A to do.
2. There is a huge difference between A and B.
3. What is important to us is to do ~.
4. It is not a matter of A, but a matter of B.
5. Whenever I do, it makes me ~.

最初この手法は同好会において講義という形で指導した。まず、「このレストランは微妙だな」という文を英訳させた。「微妙」という意味の'subtle'を知っている学生はこぞって'This restaurant is subtle.'と作文した。しかし、これは単に日本語をその意味も考えずに英訳しただけのものであり、文法的には正しいものの、「本当に伝えたいこと」を表してはいないことは明らかである。単純に単語の意味だけに注目して日本語をそのまま英語にすることの危険性を学生に伝えた上で、まず文脈について話し合った。例えば、友人にそのレストランについての感想を聞かれた場合なら、'I'm not sure about this restaurant.'でいいだろうし、また食事の会話なら、'I have mixed feelings about the foods of this restaurant.'と言ってその場に同席した相手と意見を交換できる。あるいは友人とどのレストランがいいか話し合っているなら、'I don't know if you will like this restaurant.'という表現も考えられる。

このような指導の後に「彼は噂以上の切れ者だ」という文を'rumor'という語を使用せずに英語に直す問題を

提示したところ、'He is smarter than they say.'という自然な英文が回答されたことは、この手法の有効性を物語っている。その他、「水くさいぞ」という表現を、'Tell me everything.'や'Tell me anything that you want to tell.'と学生が訳した例もある。⁵

Table 6のCのような、基本的な英文を即座に作成できない学生には、やはり個人的な学習に基づいた能力改善が必要であるが、補助的指導として、なるべく長い英文を語る訓練もしている。その一つが構文の連続使用である。初学者はとにかく短い文を作りがちであり、それは決して有効な会話行為ではない。例えば'This problem is difficult.'とだけ語った場合、二つの問題がある。一つは発話が短すぎて、会話を継続させるためにはすぐ別の発話をしなければならいということである。これに続く次の発話はこれを語った本人か周囲の誰かによってなされるであろうが、本人が語るなら、また別の意見を語る必要があるし、周囲の人物にしてみれば、情報量があまりに少ないため、質問のしようがない。しかし、ここに数語加えるだけでいくらかの情報量を相手に与えることもできるし、また発話そのものも長いと、会話の継続に役立つ。自分の意見の、言わば核に付け加えるものとして、筆者は学生に構文の暗記と使用を推奨している。Table 8にそのうちの数例が示してある。意見の核である'This problem is difficult.'に下線部を付け加えただけで、発話時間が延びるだけでなく、より詳細な気持ちの情報を伝えることができる。また、3の'clear'の箇所にも別の形容詞を入れ替えることにより、様々な表現をすることが可能である。

意見の核に付け加える構文だけでなく、自分の口癖になるような構文の暗記も効果的である。これも、学習者が自然に身につけるのを待つと同時に、例を示して使用させて覚える指導も行っている。Table 9に示すものは、1年生に提示して会話中に意識的に使用させたものである。この構文は、普段の会話の中で使用すると、さらに表現豊かなコミュニケーションを実現することができる。また、このような構文はグループワークのトピックにも応用できる。例えば、リーダー(L)がAからCのメンバーにTable 2の2の構文を用いた文を作成させ、会話まで展開することもできる。その例はTable 10に示してある。

このように、教材を事前に作成して例を示すと同時に、指導者本人が進んで応用が利きそうな構文を会話中に使用することも必要である。学生の意見では、教員が普段会話の中で用いる言葉は親しみやすく、記憶にも残りやすいということである。これは教員が海外旅行をしたりネイティブを会話したりするときを感じることで同様のことである。学生が注目している教員の得意なフレ

Table 10

A: There is a huge difference between cats and dogs.
L: What is the clearest difference between the two, B?
B: I think dogs bark but cats don't.
L: How about you, C?
C: The size is different.
L: Do you think we can train cats, A?
A: No, I don't.
L: Ok, it's your turn, B.
B: There is huge difference between teacher and student.

Table 11

table a piece of furniture with a flat top and one or more legs, providing a level surface for eating, writing, or working at
--

Table 12

cat	animal
car	vehicle
sun	planet
calendar	chart or series of pages
television	device

ーズは、会話の中だけでなく教員が送る英語の電子メールや他のSNSの中にも存在する。

Table 6 で紹介したような学生の他に、基本的に言葉によるコミュニケーションが苦手な学生がいる。そのような学生に対して有効な活動は、'What is this?' という、海外でも広く活用されているものである。これは言わばクイズのようなもので、発話者が他のメンバーに対しある語彙を英語で説明する。重要なことは、メンバー間のやり取りはすべて言葉で行われることで、ジェスチャーの使用は許されない。この語彙説明の活動は、実行してみるとあらゆる学生に有効であり、特に留学生に対して日本特有の文化や食べ物などを説明する能力を養成するのに非常に役立っている。上述したように、本活動の前に英英辞典を用いて手法を指導した。例えば、『オックスフォード新英英辞典』で家具の'table' を引くと Table 11 のように説明されている。このままの説明は語彙説明の活動では到底できないが、'What is this? It is a piece of furniture with four legs, and we eat, write, or work at it.' というくらいの説明ができれば問題ないであろう。重要なのは、まず根源的にそれが何なのか相手

に伝えるということである。Table 12 に、英英辞典を基にしたいくつかの例を示す。この語彙説明の訓練を積みこいで、短期滞在の外国人留学生に対して日本文化を英語で紹介する能力が向上した。英語同好会では英単語の他に、「正月」「絵馬」「初詣」「お盆(行事)」「ゴールデンウィーク」などの語彙説明のタスクも学生に課している。

語彙説明の手法は、普段の英会話活動時にも活用するようにしている。特に高専の場合、メンバー間の年齢差や能力差があり、それはそのまま語彙力の差につながっている。ある学生が難解な単語を発した場合、他のメンバーは理解できない。するとすぐに日本語で話したり、その話題は避けるようになってしまったりしてしまうが、他のメンバーにとって難解な単語、あるいは未知の事象についても、まずそれが根源的に何であって、何をするためのものなのか英語で説明できるようになれば、会話はますます表現豊かになる。⁶⁾

6. 環境的問題の解決策

学生が英語による発話がうまくできない場合、彼らのおかれた環境も注目すべき要素の一つである。たとえ同好会の活動に参加しても、発話という行為は極めて意図的なものであり、自ら進んで行わなければ達成されない。以下、学生が発話しやすい状況、指導法、活動に分けて論じることとする。

学生が英語で話しやすい状況としては、まずペアワークがあげられる。グループワークではどうしても上級生や英会話能力の高い学生に頼りがちであるが、二人で対話する際にはパートナーがいかにか上級者でも、自分も話す必要がある。しかし、本論の最後に紹介するように、ペアでは話が続かないと感じる学生もおり、ペアワークはその運用法に気を配るべきである。同好会では、同じパートナーとの連続したペアワークは最長30分と決めている。その後、同じトピックについて別のパートナーと話したとしても、繰り返しの効果により会話内容はさらに高度なものになる。

たとえ慣れ親しんだ話題であっても、事前準備なしに英語で会話をすることは、特に初学者にとっては難しい。突然英語で質問されて回答するような状況に学生が置かれて本人が思ったような回答ができない場合、学生の自信喪失につながるケースもある。英語のネイティブ教員と学生の英会話能力について話していると、よく「自信」という言葉を耳にする。特に高専に入学するような、比較的能力の高い学生にとって重要なのは、自信をもって話すことである。その自信を獲得するには、実際に英語を話すのが第一である。そのために、3の活動内容で

述べたように、特に低学年参加の活動では準備の時間を設けている。参加学生の学年により対応は異なるが、一年生で同好会加入後間もない学生には、ひとつのトピックに対し5から10分の準備時間を取り、場合によっては辞書を引かせながら自分の意見をまず書かせる。言いたいことを書き終えたら、さらに時間をとってできるだけ覚えさせ、その上で会話の活動を行う。時に自分の原稿を見ながらとはいえ、英語を話していることをここで実感させる。自分で書いた原稿を活動後に復習して暗記することにより、そのテーマについてはいつでも会話ができるということになり、その積み重ねが結局英会話能力の向上に繋がっていくのである。

主にペアワークのなかで取り入れている活動は二分間スピーチである。上級生は一分の、下級生は一分半の準備時間の後に提示されたテーマについてスピーチをする。ほとんど即興なので、まとまったスピーチにすることは難しいが、二分間何かを話し続ける環境を作るには適切な活動である。活動の際に用意するトピックもまた、学生の話す意欲を左右する要因になり得る。Table 1の1と2は、共にいわゆるyes-no questionであるが、これらの質問をしても、‘Yes.’か‘No.’だけで終わってしまう場合が多い。代わりに‘Tell us about...’という質問の仕方をする、話の展開がしやすいため、比較的長い発話を得られた。

7. アンケート結果

同好会メンバーを対象に、活動内容等に関してアンケートを実施した。以下、その結果について論じる。まず、同好会の開催の頻度であるが、週二回が理想的であると答えた学生と、三回と答えた学生はほぼ同数であった。二回と答えた学生はほとんど他の部活動に参加しており、それがなければ同好会に参加したいという自由記述もあった。学生にとっては、週三回が理想的であると思われる。グループ分けに関しても、ペアワークとグループワークのどちらが会話しやすいかという質問には完全に意見が分かれた。理由を見てみると、ペアワーク時の会話継続の難しさをあげている学生が目立った。経験の浅い学生ほどグループワークで複数の他者に依存しがちな傾向が明らかとなった。自分の意見を書いて準備するかどうかについては、準備なしを選んだ学生が若干多かった。特に上級生には自らをより困難な状況におき、英会話能力を高めたいと努力する学生が多い。

効果的だった活動例としては、グループワークの他に留学生との交流と外国人講師のレッスンがあげられた。やはり、日本人だけで会話をするよりも、実際に外国人と接して自らの能力を試したいという学生が多い。その

ような留学生との交流の中で自分に不足しているものについての質問では、単語力が圧倒的多数を占めた。予想外だったのは、スピーキング能力よりもリスニング能力の不足を感じる学生が多かったことである。普段の活動を通してスピーキング能力は養成されている一方で、CDなどで聞く英語とは異なる発音のアジア人の英語に興味と同時に困難さを感じる学生が多いようである。少数であるが、日本および日本語に関する知識が足りないと感じた学生もおり、興味深い結果となった。

8. 成果

アンケートでは、能力的問題を解決するために活用している語彙説明のタスクを、実際に辞書を使用せず即興で課した。テーマは「義理チョコ」である。以下、学生の説明例をそのまま例示する。また、Table 14はもう一つのテーマ、‘tradition’の説明である。

Table 13

- | |
|---|
| <p>A. It is a type of present given on Valentine's day. But it is not for only from girl to boy the girl loves. It is to give friends.</p> <p>B. It is the chocolates that we give friends.</p> <p>C. It is chocorate which girls give boy whom they don't love in Valentain day.</p> <p>D. I give it to the man who I want to tell "Thank you" to. But, I don't love him.</p> <p>E. Chocolate that you gives to your friends at st. Valentine's day.</p> |
|---|

Table 14

- | |
|---|
| <p>A. Good custom or things that are continued from long ago.</p> <p>B. A thing, skill, or culture that passed down from generation to generation.</p> <p>C. It is the thing which is continued from old days at one place. It is opposite meaning of new or change.</p> <p>D. Old cultures in a certain place or region.</p> <p>E. It is thing that many people tell us from long ago.</p> |
|---|

語彙説明を行う上で筆者が継続して指導しているのは、上述した根本的に対象物が何なのかを明示することと、その後に関係代名詞を使用することである。二つの表を見ると、おおよその学生がその指導に沿って作文していることが分かる。一方でTable 13のDのように、完全に会話という状況を見据えて書いている者もいる。細か

なスペルミスや文法的不正確さなどはさておき、皆それぞれ得意な表現を駆使して、何とかテーマの語を表現しようとしているのが分かる。表の英文には当然1年生のものも含まれており、このまま努力を続けていけば高度な英語コミュニケーション能力を身につけられるであろう。

9. 今後の課題

英語同好会の4年間の活動を総括した中でいくつかの課題が明らかとなった。まずはメンバーのモチベーションである。着実に英会話能力を身につけるためには、長期にわたって継続的に活動に参加することが重要である。もう一つメンバー個人の課題としては広い意味での英語力があげられる。特に語彙力とリスニング能力である。共に学生の自習に依存せざるを得ないが、共に学習教材などを個別に貸出したりして学習を補助している。組織的な課題としては学生の自主性の養成と活動のバリエーション増加である。現在は活動時に使用するすべての教材は顧問が用意している。しかしドラマやディベートなど、学生が自ら調べて教材作成までこなせば、個人の実力向上だけでなく、組織全体の有効性が増加するであろう。

注

¹⁾ 同好会で採用しているロール・プレイや人物描写等、様々な活動の有効性は多く指摘されている。例えば、長

澤邦紘(1988)『コミュニケーション・アプローチとは何か』三友社、88-100頁。

²⁾ 河内は、スピーキングの促進要因の一つとして、精通したトピックや予想が容易な内容であることを挙げている。富田おる, 小栗裕子, 河内千栄子(編)(2011)『リスニングとスピーキングの理論と実践—効果的な授業を目指して』大修館書店、173頁。

³⁾ 木村は日本人大学生の書く英文に受動態が多いこと、そしてそれが不自然で改善されるべきものであると結論付けている。木村郁子「なぜ日本人学生の英作文に受動態表現が多いのか? ——学生英作文からの考察と指導についての提案——」『言語文化論叢』千葉大学言語教育センター 第7号 129-33頁。

⁴⁾ 伊原は、我々日本人は一文化二言語使用者(unicultural bicodalist)であるとし、日本語をうまく用いた英会話上達法について論じている。伊原巧(2006)『英語の上達法を考える』大阪教育図書 106-16頁。

⁵⁾ これは、コミュニケーションが困難であると判断した際に話者がとる、いわゆるロングの「会話調整」(modified interaction)に通ずるものがあるのかも知れない。「会話調整に伴う言い換え」(modified output)とは、相手の要求に応じて文の構造を変えたり、表現を言い換えることで、より高いレベルの発話を試みる機会が与えられる。この点に関しては、さらに集中して指導することにより、大きな成果が期待される。中谷安男『オーラル・コミュニケーション・ストラテジー研究』開文社 25-6頁。

⁶⁾ 言い換えるの重要性は、富田ほか(編)『リスニングとスピーキングの理論と実践』182-3頁でも指摘されている。